

イネカラバエ越冬雑草に関する2,3の調査

* 望月正己・** 西野二期・** 山口祐二

* (富山県農業試験場) ** (富山県上婦負農業改良普及事務所)

この調査は富山県の中央部に当る富山市と奥羽町で、対象とした越冬雑草はスズメノテツボウ、スズメノカタビラ、ミノゴメ、カヅノコグサ、オオムギの5種である。越冬雑草にでる傷葉はその雑草ごとに程度がちがつているが、食害量の最も多いと思われるのはスズメノテツボウであつたがミノゴメも比較的多い方であつた。傷穂に於ても種類間に差がみられスズメノテツボウは最も顕著であり、ミノゴメやカヅノコグサはあまり明瞭に現われなかつた。食害量の多いと思われる雑草は越冬幼虫の形態も大きく、その越冬生存歩合も高いようである。4月18日に越冬雑草をぬきとり幼虫の体長を調査したところ第1表のような結果を得た。寄生雑草の種類による本虫の越冬環境については、さらに調査が必要であるが、本年調べ得た結果で

第1表 越冬幼虫の体長 (10頭平均)

雑草の種類	平均体長 (mm)
スズメノテツボウ(畑)	5.93
スズメノテツボウ(水田)	5.76
スズメノカタビラ	3.73
カヅノコグサ	5.07
オオムギ (富山市)	5.93
ミノゴメ	5.61

は、越冬後の生存歩合が最も高いものはスズメノテツボウで55~85%を示し、ミノゴメも相当高いように思われたが充分な調査を行い得なかつた。カヅノコグサやスズメノカタビラは越冬後の生存歩合が低く、カヅノコグサは4月18日に調査した結果では14%程度であつた。越冬後生存歩合の最も低いと思われるスズメノカタビラについて時期別にその在虫莖歩合を調査した結果は第2表の通りである。即ち、初冬期に産卵食入後3月中旬頃までの比較的気温の低い間は、寄主植物

第2表 時期別在虫莖歩合の推移

調査月日	月日							
	3.22	3.26	4.1	4.5	4.8	4.12	4.18	
在虫莖歩合	90.90	88.89	71.43	39.13	33.33	13.33	0.00	

の種類差はあまり問題とならないで、気温が相当高くなり植物の生育が旺盛になりつつあるときに至つて、本種の生存に変動をあたえる環境的原因が現れるもののように考えられる。越冬虫の生存歩合が急激に低下する4月の第1, 2半旬に於いて寄主植物の生育変動について調査したところ、第3表に示すように出穂が非常に大きな関係をもつもののように考えられた。こ

第3表 出穂程度と生存歩合の変動

出穂程度	0	1/10~5/10	5/10~完全出穂
生存虫数歩合	66.67%	9.1	0.0

れは、出穂によつて食物の主な給源が断たれるためではあるまいか。

富山県に於けるイネカラバエの越冬は、前記の5種類とメヒジバ等の植物がその主なるもののように考えられるが、これらに寄生し越冬した幼虫はその植物の種類によつて幾分生長にちがいのできることは前述の通りである。また、スズメノカタビラのように出穂の早いものはその栄養とするものが無くなるために食草内で幼虫が若死するようなものもあるが、蛹化または蛹化しようとして移動する時期、またはその部位等については雑草の種類による差があまりないようである。なお、越冬幼虫の生育状況は、積雪などの関係で12月23日から3月16日までの調査ができなかつたので、その間の生育変動については判きりしないが、その後3月中旬より急激に体長がふえていくようで、4月20日以降は前述のように寄主体内で若死したためにスズメノカタビラでの調査は不能となつた。スズメノカタビラでの幼虫体長は第4表の通りである。

第4表 スズメノカタビラに於ける幼虫の体長 (10頭平均)

調査月日	月日							
	11.23	3.16	3.22	3.26	4.1	4.5	4.8	4.12
平均体長 (mm)	1.51	2.13	2.40	2.55	3.06	3.46	3.35	4.20